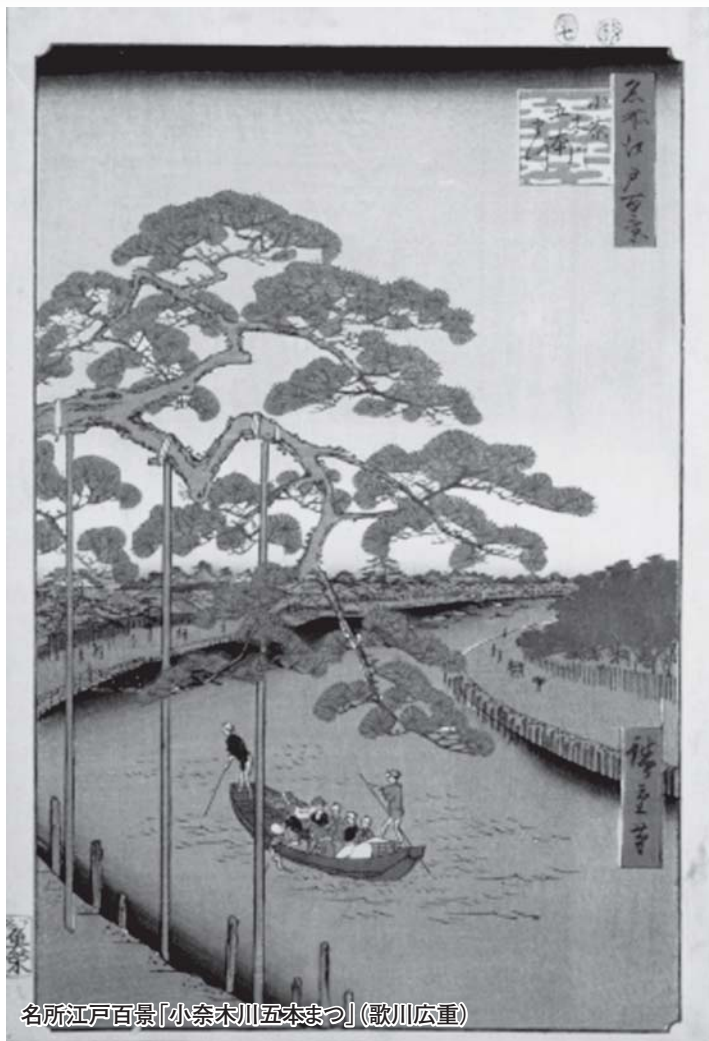


歴史と文化を 考えよう

2011 江東区文化財保護強調月間



名所江戸百景『小奈木川五本まつ』(歌川広重)

下町文化

NO. 255
2011.9.28

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○文化財保護強調月間

○民俗芸能大会

演目紹介

○文化財講習会

「江東区の

近代遺産とまちづくり」

○震災復興建造物 深川東京モダン館展示関連

昭和モダンと食文化

○江戸の町内探訪③

佐賀町

○区指定・登録文化財の

東日本大震災被害報告

○城東の村を歩く①

江東区の開発の歴史

文化財の秋を楽しもう

もうすぐ秋10月を迎え、読書に、文化に親しむ季節となりました。この時期、教育委員会では、歴史・文化財に関わる公開、講演会、講座を実施いたします。ぜひご参加ください。

まず、10月16日(日)には、民俗芸能大会が区民まつりの一環として実施されます。深川や砂町で生まれ、江戸時代の粋をいまに伝えています。

また、26日(水)から始まる文化財講習会では、「江東区の近代遺産とまちづくり」と銘打って、講演会・講習会を行います。江東区は、関東大震災と震災によって、多くの文化財を失いました。その中をくぐり抜け、現在に遺る建造物(建物や橋梁など)を近代遺産といいます。建物自体に価値があることはもちろん、まちづくりにどのように生かしていくかという活用の視点も欠かせません。震災復興の観点から、深川東京モダン館でも、旧東京市深川食堂に関する展示を行います。

どの事業も江東区の歴史と文化を知る上で、貴重な機会といえます。民俗芸能で江戸を堪能し、文化財講習会で震災からの復興について聞き、そして歩き(文化財めぐり)、多くのことを学んでください。詳細は次頁以降です。

「江東区の近代遺産と

まちづくり」

街中で、これちよつと古いなと思う建物や橋を見たことはありませんか。今回は、本区の近代史を物語る近代遺産にスポットを当てます。

* * *

都市の景観は、めまぐるしく変化しています。そのなかで、時の流れに取り残されたかのように、古い建物が建っています。その歴史を追えば、地域の歴史を垣間見ることができでしょう。

文化財講習会では、区内に残された明治から昭和初期に造られた建造物にスポットを当て、移り変わる街並みのなかで、どのように保護し、今後のまちづくりに活かすことが出来るのかを考えます。



豊洲の造船所 昭和30年頃

産業遺産の再生活用で

魅力的なまちづくりを

〔講演会〕

講師 大内 浩（芝浦工業大学教授）
日時 10月26日（水）

午後6時30分～午後8時30分
会場 深川江戸資料館2階小劇場
（白河1―3―28）

内容 豊洲開発での成果と未解決課題／ボストン、ロンドンなどの海外事例から学ぶ／江東の産業遺産活用アイデアと実現方策

費用 無料

定員 180人（先着順）

申込 当日直接会場へお越し下さい。

〔文化財講座〕

①江東区の震災復興と近代遺産

講師 江東区文化財専門員

日時 11月2日（水）

午後6時30分～午後8時30分
会場 深川江戸資料館地階レクホール
（白河1―3―28）

内容 大正12年、江東区は関東大震災で大きな被害を受けました。復興のなかで、現在の街並みの骨格が定まり、災害に強い建物や橋が造られました。これら近代遺産は失われ

つつあり、街並みは大きく変化しています。残された近代遺産を紹介し、その保護と活用を考えます。

②文化財めぐり／近代遺産を歩く

ガイド 江東区文化財保護推進協力員

日時 11月6日（日）

午後1時～午後4時30分の間で約2時間30分歩きます。

内容 清澄・佐賀・福住に残る近代遺産をめぐります。

集合 深川江戸資料館地階レクホール（白河1―3―28）

解散 深川東京モダン館（門前仲町1―19―25）

コース 清洲寮→旧東京市営店舗向住宅→清澄庭園周辺→中之堀倉庫街→佐賀町河岸通り→食糧ビル跡→旧東京市深川食堂（現深川東京モダン館）

雨天時 注意報・警報発令の際には、スライド上映となります。

※①②共通

定員 30人（①②とも参加できる方。抽選）

費用 無料

申込 往復葉書に、「文化財講座希望」と書き、住所・氏名（ふりがな）・電話番号を記入し、〒135―8383

東陽4―11―28 区役所文化

観光課文化財係へ

ベ切 10月12日（水）必着

深川東京モダン館主催

文化財講習会タイアップ事業

「震災復興橋めぐり」

ガイド 江東区文化財ガイド員

日時 10月29日（土）

午前10時から1時間毎5便運行（正午～午後1時の間は休み）

内容 関東大震災の復興橋りょうを船でめぐります。

航路 黒船橋乗船場→大横川→平久川→仙台堀川→大横川→小名木川→隅田川→黒船橋乗船場（約45分）

※詳細・申込方法については、深川東京モダン館（5639―1776）へお問い合わせください。

震災復興橋りょうの一つ 福寿橋（大横川）昭和4年竣工

3

昭和モダンと食文化

大正12年（1923）9月1日に起きた関東大震災は、東京のみならず関東や東海地方に甚大な被害を及ぼしました。この震災後、政府は帝都復興院を設立し、本格的な復興に着手します。江東区域では、区画整理や道路の新設、鉄筋コンクリートによる住宅や学校などの建築が相次いで進められました。一方、大正7年の米騒動以来、米価安定といわれる零細民救済のため公営食堂の設置が計画されます。これは、震災以降に本格化し、昭和7年（1932）に東京市深川食堂が設置されました。（詳細は向山伸子「市民の食生活を支えた市設食堂」『下町文化』No.247を参照）。深川食堂は、構造物として強固なだけでなく、特徴的な丸窓や玄関や階段部にモザイクタイルをつけるなど、当時の新しい建築様式を取り入れたものでした。このように新しい様式は、建築のみならず社会生活や風俗にも同様に波及し、「昭和モダン」と呼ばれるムーブメントとなりました。

昭和モダンは、アールヌーボーやシャンソンなどといった最新の西洋文化の摂取にとどまらず、竹久夢二や江戸川乱歩などの独特な世界観も登場さ

せました。生活様式も変化し、女性は日本髪・和服和装から洋服・帽子へと装いを変え、モダンガールと称される人も現れました。食事も同様で、カレー・カツレツ・コロッケに代表される洋食が食べられるようになります。百貨店（デパート）と呼ばれる新たな大規模店舗にはレストランが併設され、明治35年（1902）には、銀座資生堂薬局内にソーダ・ファウンテン（現資生堂パーラー）が誕生、繁華街でもカフェや喫茶店が営業を開始します。深川区でも紙間屋木屋源が喫茶部を設置しています（松村浩士「ココにも歴史があった」『下町文化』No.243）。

このように東京市営食堂にとどまらず、公衆食堂と呼ばれる店舗や施設が登場しました。洋食や中華などの食文化が和食と交わり、日本の食文化も少しずつ変化を遂げていきます。東京案内社の『欺されぬ東京案内』（大正11年）には簡易食堂の中で銀座三越と白木屋のレストランを取り上げ、「こんな便利で軽廉な喰物を供給する所は他に求められない」としています。しかし、東京市営食堂の値段と比較すると差が

【表】東京市営食堂と百貨店食堂の値段比較

	東京市営食堂	三越食堂	白木屋食堂
定食(甲)	朝10銭 昼・夜15銭	—	—
定食(乙)	朝8銭 昼・夜10銭	—	—
和洋食ランチ	50銭	—	90銭
親子丼	30銭	50銭	—
コーヒー	5銭	5銭	5銭
牛乳	5銭	10銭	10銭

※東京市営食堂は向山掲論考、三越・白木屋食堂は『欺されぬ東京案内』（東京案内社 1932）より作成した。

見られます（【表】参照）。また、三越では鰻めし1円、サンドウィッチ40銭、白木屋でもゆで玉子20銭などの料理もあり、当時ラーメン1杯10銭であることを考えるとかなり高価であり、百貨店を利用する人々はそれなりに経済的に豊かであったことがうかがえます。

では、当時の人々はどういう食事をされていたのでしょうか。大正から

昭和にかけては実用的な料理本が数多く出版されています。ここではカレーの作り方について、赤堀割烹教場（現赤堀栄養専門学校）の創立者赤堀峯吉が記した『和洋家庭料理法』をもとに見ていきます。「ライスカレー」は、肉を細かく刻み、20分ほど煮た後に玉葱、芋を入れ、カレー粉や胡椒を入れると記されています。また、盛りつけ方は「飯と肉類とは別に器に盛るもよいが、大概は一つの器に盛って」おくのが美味となるとあります。使う肉に最も適しているのは羊肉、ただし日本人の口に合うのは鴨や鶏、ウサギなどとし、野菜も椎茸、クワイなどを入れ、玉子を割りかけると一層おいしくなるとしています。現在われわれが食べるカレーライスとは少し違和感を感じる部分があるかもしれません。深川食堂で出されていたカレーがどのようなものかは不明ですが、目新しい料理として捉えられていたのではないのでしょうか。

10月22日（土）より、深川東京モダン館では「モダンな食堂へようこそ」と題し、旧東京市深川食堂にちなんだ企画展を開催します。「食欲の秋」でもあるこの機会に、是非一度ご来館下さい。

（深川東京モダン館 副館長 龍澤潤）

佐賀町

今回取り上げる町は、隅田川沿いに南北に長く展開した佐賀町です。同町は、以前(二五一号)取り上げた清住町の南に位置します。元禄一年(一六九八)に架橋された永代橋は、同町の内から日本橋に架けられました。その意味で、同町は深川南部の物流の結節点といえます。また、堀割の多い深川南部にあつて、南北に細長い佐賀町は、橋によつて結ばれていました。上・中・下之橋は、隅田川に流れる各堀割の河口部に架けられ、この地域の暮らしを支えていました。

佐賀町の歴史

佐賀町は、寛永六年(一六二九)に次郎兵衛、藤左衛門によつて開発され、元禄八年(一六九五)頃に次郎兵衛町

と藤左衛門町が一町となり、町名が佐賀町に改められました。

また、同町の北に位置する清住町、南に展開する相川町・熊井町・諸町・富吉町・黒江町・大島町とともに、深川獺師町と呼ばれました。獺師町が月に三度の割合で、幕府に魚介類を納め、船による幕府御用を務めたことは、清住町でも記しました。では、さっそく町内を歩きましょう。

町内を歩く

ここでは、『御府内備考』をもとに、佐賀町の北の端に架けられ、清住町と結ぶ上之橋①から出発します。ちなみに、上之橋は、仙台堀の河口部に架けられた橋で、北詰は仙台藩の蔵屋敷でした。この屋敷は、元禄一年(一六九八)に御用地として召し上げられた土地が、仙台藩に渡り、建設されたとあります。仙台堀とは里俗(地元の人々)の呼称で、蔵屋敷があることから言われたようです。



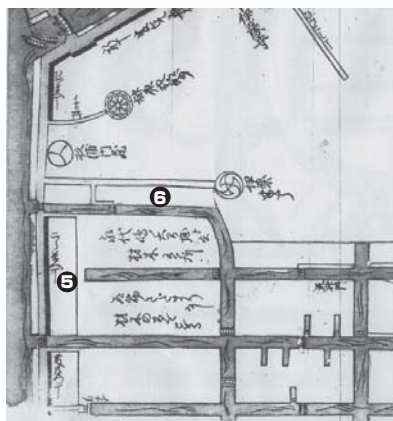
絵図1 「本所深川絵図」(嘉永5年.1852)

さて、絵図1を見ると、上之橋から南に走る、往來の両側に町名が記されています。これは、往來を挟んで隅田川寄りが河岸地、内側が本地(居住地)を

示すもので、このあたりの町には、一般的な景観でした。隅田川を右に見ながら南へ歩くと、すぐに中之橋②です。上之橋からこの橋までが上佐賀町で、橋を渡ると中佐賀町です。橋がかかる堀割は、中之堀です。中之堀は、鍵状に折れ曲がっていますが③、これは開発当初の名残といえます。さらに南へ歩くと、下之橋④が見えてきます。この橋を渡ると、下佐賀町に入ります。中之橋と下之橋は、ともに町境でした。下佐賀町には、近辺に大名屋敷や幕府の御船手組屋敷などがありました。

上之橋と元禄期

ここでは、三橋のうち、上之橋に注目します。『御府内備考』には、三橋の架かる堀割について、「同十二卯年四月中御普請御奉行深津八郎右衛門様御懸り二而、上之橋川筋新規堀割、中之橋下之橋川中堀広ケ之砌、当町地面千七百四十四坪御用地ニ被召上候」と



絵図2 「江戸方角安見図」(国立国会図書館所蔵)

の記述があります。そこから、元禄一二年(一六九九)四月に御普請奉行の深津八郎右衛門が担当し、上之橋の川筋を新規に掘ったこと、その際に中・下之橋の川筋も広げたこと、そのため佐賀町の土地一七四坪を御用地として召し上げたことが記されています。この内容で気になることは、上之橋の川筋を新しく掘ったという記述です。どこを、どのように掘ったのか、絵図2をご覧ください。これは、延宝八年(一六八〇)当時の深川の様子を描いた絵図で、「江戸方角安見図」といいます。明暦の大火後、木置場は現在の佐賀・永代・福住付近に移りました。のち、元禄一四年に現在の木場公園辺りに移る前のことです。新規の堀割とは、隅田川と結ぶため切り開かれた⑤の部分と考えられ、その北に仙台藩蔵屋敷が築造されたと見ることができま

す。一方、⑥の堀割は、埋められたと考えられます。このような普請を重ね、絵図1のような地域構造になりました。今回は、佐賀町を取り上げました。上・中・下の三橋を境に、町の内も分かれていたのは興味深いといえます。佐賀町だけでなく、深川全体の堀割がどのように変容を遂げたのか。今後の課題にしたいと思います。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

区指定・登録文化財の 東日本大震災被害報告

現在、屋外にある区指定・登録文化財（有形文化財、および史跡にある墓石・玉垣などがある史跡）は全部で572件あります。その中には、東日本大震災で被害を受けたものもあります。そこで、今回は文化財保護推進協力員のみなさまにご協力いただきました。全件の震災被害調査を行いました。ここではその成果を報告いたします。

表1をご覧ください。572件の屋外にある区指定・登録文化財のうち、全体の9割以上の文化財には被害がありませんでした。残念ながら被害を受けてしまった文化財も、すでに半数以上

は修復済み、あるいは修復中です（なお、表の数字は平成23年7月15日時点のもの）。被害状況は倒壊が合計28件で、被害件数の7割強にあたります。文化財の形態としては、石造燈籠の被害が目立ちます（表2）。石造燈籠は、構造上、地震にはあまり強くないようです。

写真1は、志演神社（北砂2-1-37）の「石造燈籠 明治39年在銘 一對」（区登録有形文化財 建造物）の震災後の写真です。一對の燈籠のうち、拝殿に向かって左側の燈籠だけ倒壊したのは、近くの木の根によって基礎が

傾いていたためとみられます。笠と呼ばれる部分は基礎から数メートル離れたところに落ちています。なお、この燈籠は現在はいきれいに修復されています。

富岡八幡宮（富岡1-20-3）でも、永昌五社稲荷神社前の石造燈籠で倒れたものがありました。また、富岡八幡宮の「石造鳥居 文化2年在銘」（区登録有形文化財 建造物）は、鳥居の一番上の笠木が正面向かって右側に3cm程ずれてしまいました（写真2）。笠木はかなりの重さがあり、しかも繋ぎ目はセメントで補強されていました。この鳥居は西を向いて建っており、笠木は南北方向を向いています。今回の地震で江東区は南北方向に大きく揺れたため、笠木はその揺れをまともに受けてしまい、ずれてしまったものとみられます。落下しなかったのは不幸中の幸いでした。震災後倒壊防止のため、鳥居全体がロープと金属パイプで固定されていましたが、今は元通り



写真1 志演神社の燈籠（4月26日撮影）



写真2 富岡八幡宮の鳥居（5月6日撮影）

表1 屋外にある文化財の被害状況

調査対象	計572件	割合(%)
被害無し	531件	92.8
倒壊	11件	1.9
一部破損	5件	0.9
修復中	4件	0.7
修復済	17件	3.0
その他	4件	0.7

倒壊から修復済まで被害文化財 37 件

表2 被害状況の内訳

被害文化財	38件	割合(%)
石造燈籠	倒壊 23件 60.5	一部破損 3件 7.9
墓石	倒壊 2件 5.3	一部破損 1件 2.6
石造鳥居	倒壊 0件 0	一部破損 2件 5.3
石造玉垣	倒壊 1件 2.6	
石塔	倒壊 2件 5.3	一部破損 3件 7.9
石造狛犬	一部破損 1件 2.6	

1 件の文化財で関連石造物 2 件が倒壊したケースがあり、合計は 38 件となった。

富岡八幡宮（富岡1-20-3）でも、永昌五社稲荷神社前の石造燈籠で倒れたものがありました。また、富岡八幡宮の「石造鳥居 文化2年在銘」（区登録有形文化財 建造物）は、鳥居の一番上の笠木が正面向かって右側に3cm程ずれてしまいました（写真2）。笠木はかなりの重さがあり、しかも繋ぎ目はセメントで補強されていました。この鳥居は西を向いて建っており、笠木は南北方向を向いています。今回の地震で江東区は南北方向に大きく揺れたため、笠木はその揺れをまともに受けてしまい、ずれてしまったものとみられます。落下しなかったのは不幸中の幸いでした。震災後倒壊防止のため、鳥居全体がロープと金属パイプで固定されていましたが、今は元通り

に修復されています。なお、この鳥居は文化2年（1805）に富岡八幡宮の三の鳥居として境内の参道に建てられました。大正12年（1923）の関東大震災で倒壊し、大正14年に現在地に再建されたことが柱に刻まれています。今回被害を受けた文化財の中で最もサイズが大きいものでもあります。石造狛犬も重量のある文化財ですが、冬木弁財天（冬木22-31）の「石造狛犬 一對」（区登録有形文化財 彫刻）は、今回の地震で動いてしまいました。写真3をよく見ると、狛犬の前に4cm程ずれてしまっています。この狛犬は頭部のある方が南側です。で、富岡八幡宮の鳥居と同様に、南北方向の揺れのエネルギーを強く受けて



写真4 冬木弁財天の狛犬吠像(修復後)



写真3 冬木弁財天の狛犬吠像(4月23日撮影)



写真5 三沢局墓(平成6年12月4日撮影)



写真6 三沢局墓(平成23年5月20日撮影)

しまったものと考えられます。また、狛犬の台座のくぼみが浅かったことも影響しているのでしょうか。なお、この狛犬は後日、氏子の方々の手によって無事元の位置に戻されました(写真4)。

震災で被害を受けた文化財の中には、修復を待っているものもあります。浄心寺(平野2-4-25)にある「三沢局墓」(区登録史跡)は、震災前は写真5のように墓石や燈籠、玉垣などが建っていました。震災によって倒れてしまいました(写真6)。現在、浄心寺では修復の準備を進めているところで、墓石などは一時的に境内の安全な場所に移されて保管されています。

成等院(三好1-6-13)にある「紀伊国屋文左衛門墓」(区登録史跡)は、墓石は無事でしたが、墓域を囲んでいる玉垣が震災によって一部倒壊してしまいました。玉垣は一部がかけると強度が大幅に落ちるため、このままでは残った玉垣も倒壊するおそれがあります。そこで、これ以上倒れないようにロープで補強されています。墓域は現在黄色のテープで立ち入り禁止の措置がとられています(写真7)が、事前に成等院に連絡すれば、安全に注意しながらお参りできます。充分な安全を確保するには玉垣全体を改修なり撤去する必要があるため、以前のようには自由にお参りできるようになるには、今しばらく時間がかかりそうです。



写真7 紀伊国屋文左衛門墓 入口(4月13日撮影)

玉垣は他の寺院でも倒壊した事例があり、地震にはあまり強くないようです。区内でも地域によって揺れの強弱があったようですが、浅間神社(亀戸9-15-7)では、境内整備の折に石造物の補強工事を行っていたため、区登録・指定文化財の被害はありませんでした。文化財についても、地震に対する日頃からの備えが大切なようです。

今回、屋外にある区指定・登録文化財572点の全ての現況を確認して保護していく上で、文化財保護推進協力員みなさまのお力添えが大変心強いものであることをあらためて感じました。この場を借りて、文化財保護推進協力員みなさまに厚く御礼申し上げます。

(文化財専門員 中西 崇)

江東区の 開発の歴史

現在の砂町・大島を中心とする地域の大半は宅地や工場地となっていますが、かつては農村地帯でした。今は城東地区に田畑の広がる風景はありませんが、残された記録や文化財にその名残りをうかがうことはできます。本シリーズでは、江戸時代に開発された城東の村々の歴史を、文化財や歴史資料とともにご紹介します。

江東区域の開発

江戸の一部を除く江東区域の大半は、江戸時代に埋め立てられた新開地で、それ以前は大部分が干潟や小島であったと思われます。開発の契機は、天正18年（1590）の徳川家康の江戸入府で、同年には行徳（市川市）との舟運の確保を目的としたといわれる小名木川が開削されました。さらに天正年間に小名木川村、慶長元年（1596）には深川村や海辺新田の開発が行われたとされます。その後も埋め立てや開発が進められ、寛永年間（1624～1644）には深川獵師町（永代付近）や、八右衛門新田（北砂）が成立しました。

こうした昔の地域の様子を知るには

地図を見るのが早道です。しかし、江戸時代の初めには、江戸を描いた絵図に江東区域はほとんど描かれず、当時の様子を確認することはできません。これは当初、隅田川東岸地域は江戸の中には含まれていなかったためです。

しかし、明暦3年（1657）に江戸の大半を焼き尽くす明暦の大火がおこります。これを契機として武家屋敷や寺院、町屋が江戸の周辺に移転し、深川地区は再開発されて町場化が進みました。この時の埋め立てには、水路掘削や自然堆積した河川の土砂などが利用されました。そして寛文11年（1671）板行の「深川本所浅草図」で深川も絵図に記載されるようになりました。

元禄期（1688～1704）には、江戸のゴミを利用した埋め立て地域がさらに拡大し、十五万坪（木場）・六万坪（東陽）などが造成されていきました。

一方、城東地区も砂村（現砂町地域）を中心に新田開発が進行しました。万治2年（1659）に、砂村新田が開発されたほか、治兵衛新田・太郎兵衛新田・八郎右衛門新田など多くの新田村が、元禄10年（1697）の検地までには成立しました。そして、明和年間（1764～1772）に平井新田

（東陽・南砂付近）が開かれ、江戸時代の開発はほぼ終了しました。



東都近郊図 部分（文政13年、1830）

城東地区の農産物

開発で成立した城東の村々は、大都市江戸の近郊農村として、畑作を中心とする新鮮な野菜の供給地となり、農産物は江戸市民の食卓に供されました。

品目はキュウリ・ナス・ネギ・インゲン・葉菜類などです。名産品も生まれ、亀戸・大島では亀戸大根、砂村では砂村ネギ・スイカなどが有名でした。

また、野菜の促成栽培も行われており、温室栽培によって出荷時期を早める方法は、中田新田（東砂）の松本久四郎が始めたといわれています。砂村産の季節を先取りするナス・キュウリ・インゲンなどは、高級な初物として江戸の料理屋に販売されました。

近代以降の発展

明治以降も城東地区の農業は盛んで、東京へ新鮮な野菜を供給しました。しかし、一方で明治末ごろからは小名木川などの川や堀沿いを中心に工場が進出し、住宅も増加していきました。砂町地域では戦後まで耕地が残っていましたが、これも次第に減少していききました。昭和以降には、農産物の内容も野菜そのものからネギやニンジンなどの種子栽培に変化するなど野菜供給地としての性格は薄れていきました。



砂町の農村風景（昭和30年頃）

現在では、城東地区で農村風景を目にすることはありませんが、地域に残された石碑や史跡、江戸時代の絵図などにその痕跡が刻まれています。普段何気なく歩いている街なかに残された地域の歴史を探してみましよう。

（文化財専門員 斉藤照徳）